教育研究業績書

2026年11月06日

所属： 看護学科　　資格： 准教授　　氏名： 山口　晴美

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学	QOL リラクセーション　看護技術　看護教育
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪大学医学部保健学科看護学専攻　卒業 大阪大学医学系研究科保健学専攻博士前期課程　修了 武庫川女子大学大学院看護学研究科博士後期課程　修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.卒業研究指導	2020年4月～	教授と共に学生６名に対して、卒業研究指導を行っている。具体的には、テーマの設定・計画書の作成・実験等実施・分析・論文作成である。
2.グーグルクラスルームでの国家試験過去問題の配信	2019年4月1日～2020年3月31日	全学年に対して、グーグルクラスルームを使用した国家試験対策委員による国家試験問題の配信を行っている。毎月１日と１５日に配信を行った。正答率70％以上の必修問題を一年を通じて配信することで、学生の国家試験対策に取り組む習慣づけ、力の向上を目指した。
3.学生委員として学生生活や集団活動への参加支援	2015年4月1日～2019年4月31日	学生委員として、充実した学生生活となるように支援した。具体的には、SNSの使用方法や季節性感染症への対策や予防接種施行の支援、教員と学生の交流会の開催を行った。また、集団活動へ積極的に参加できるように支援した。具体的には、体育祭における集団演技への学生参加を支援し、学生の役割分担、演技構成、編曲、練習参加の付き添いといったアドバイザーの役割を担った。
4.演習および実習時の身だしなみに関する資料	2015年～現在	看護学部演習及び実習時の学生の身だしなみに関する資料を作成した。本資料は、看護学部臨地実習共通要項および基礎看護実習Ⅰ・Ⅱ要項に使用されている。
5.実習担当教員として学生の指導	2014年4月～現在	病院実習において、学生が主体的に実習に臨むことができるように、社会人としての基本的事項から、より実践的な担当患者に即した看護計画となるような指導を心掛けている。また、論理的思考力の育成及び論述する力をつけることが出来るよう記録やレポートの作成を個別に指導している。
6.学生の看護技術自己練習時の指導	2014年4月～現在	学生が看護技術を習得していくためには、授業時間外の自己練習が必須となる。学生が主体的に自己学習できるように自己練習日を設定し、適宜学生の質問対応や指導を行っている。
7.学生委員として学生生活への支援	2014年4月～2015年3月	学生委員として学生生活が円滑となるよう適宜実施する学生ガイダンスや、学生生活に関するアンケートの作成・実施・集計・分析を担当し、学生生活の支援活動を行う。
8.実習病院責任教員として基礎看護学実習ＩⅡを担当する	2014年4月～2015年3月	実習病院先との調整や実習説明会の開催、健康問題を抱える学生との面談や各教員への周知といった実習運営を主担当として担い、学生の指導や成績の判定に加え非常勤の補助教員への指導やインシデント発生時の対応等を行う。
9.基礎看護学分野の教員として、新入学生への健康面でのフォロー	2014年4月～2015年3月	新入学生のうち健康面に不安を抱える学生に対して面談を行いフォローを実施
10.大阪大学医学部保健学科にてティーチングアシスタントとして勤務	2009年4月～2011年3月	主に生理学演習、解剖学見学実習、成人看護学演習を担当し、演習の補助や学生の指導を行う。
2 作成した教科書、教材		
1.排泄の援助技術の講義・演習に関する資料	2020年4月～	排泄の援助における講義資料と動画を作成し、浣腸・陰部洗浄のデモンストレーション動画の作成および演習を行った。
2.創傷管理技術に関する資料	2020年4月～	創傷管理技術における「スキンテア」についての講義

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
3.感染予防の具体的な対策に関する資料	2020年4月～	資料および動画を作成した 基礎看護学技術演習Ⅲ「感染予防の具体的な対策」について、「隔離法およびガウンテクニックの原則および基本的技術」に関する講義資料・デモンストレーション動画を作成した。本演習科目は実技試験があるため、実技試験へ向けて学生の自己学習が円滑に実施できるよう、感染予防行動の原理原則を暗記するではなく、正しく理解し実践につなげることができるような講義・演習となるように工夫した。
4.EBN演習で使用する資料	2018年10月～現在	基礎看護技術演習におけるEBN演習に関する学生への説明資料、講義資料、演習中の指導要領等を作成した。EBN演習は、学生自身が看護技術に対する疑問から答えを見つける方法を考え、自ら答えを見つけ結果をまとめ皆の前で発表する本学の特徴的な演習である。
5.炎症反応緩和技術に関する資料	2017年9月	基礎看護技術演習Ⅲの科目で使用する。2年生後期の診療の補助技術の前半で学習する科目であ罨法について講義・演習を行った。生体への影響が大きく、目的と援助方法が一致しなくてはならない。また、そのためには看護師の的確な判断が求められる。解剖学・生理学の知識を確認しながら説明し、学生が根拠に基づいて援助を考えることが出来るように事例検討を行うなど工夫した。
6.洗髪に関する講義・演習資料	2016年6月～現在	基礎看護技術演習Ⅱの科目で使用する講義・演習資料を作成した。2年次前期の日常生活への援助技術の最終項目となる。湯を用いた援助であり、多くの道具を使用し、体位変換や体位の固定といったこれまでに学習してきた知識や技術を組み合わせて行わなくてはならない。また、病院実習の際に患者さんへ援助させて頂くことの多い技術である。以上を踏まえて、患者さんに実際に援助させて頂くことをイメージし、迅速にかつ的確な援助ができるよう、効率良く物品を配置・準備し患者さんの安楽を考えることが出来るよう作成した。
7.フィジカルアセスメント（消化器）に関する資料	2016年～	フィジカルアセスメントは、問診・視診・聴診・打診・触診などを行い、患者さんの症状を把握・評価し、状態に即した対応を検討していく診察技術を学習する。消化器は嚥下から消化、吸収、排泄までと見るべき箇所が多い。学生自身がペアをなり実際に互いに観察を行いながら進行する授業形態とし、知識と手技が一致するように工夫した。
8.看護学部実習時の学生の身だしなみに関する資料	2015年6月～現在	看護学部演習及び実習時の学生の身だしなみに関する資料を作成した。演習が始まる１年生や各学年への身だしなみの指導の際に、また、看護学部共通の実習要項に作成した資料が使用されている。
9.血圧に関する資料	2015年4月～現在	オープンキャンパスの基礎分野の企画で使用する血圧に関する資料を作成した。対象は高校生とその家族となるため、一般的に使用されている言葉を用いて分かりやすくし、かつ武庫川女子大学看護学部へ入学してもっと詳しく学びたいと思ってもらえるように本学看護学部の特徴を加えて工夫して作成した。
10.感染症予防・注意喚起のポスターとガイダンス資料	2015年～現在	季節性感染症についての予防方法や注意喚起のポスターを作成し、学内各所に掲示した。また、ガイダンス時に学内での予防接種の接種方法や罹患した際の手続き等について資料を作成し学生に説明を行った。
11.静脈血採血のDVDの作成	2014年12月	基礎看護技術演習Ⅳ－2における採血（静脈血採取）の講義において、これまでに授業や演習で学習した無菌操作や注射器を扱う際の留意点、人を対象として採血を行う際の留意点を学生が視覚的に具体的にイメージできるように、自身が看護師役、他教員が患者役となり実際に説明しながら採血を実施しDVD教材を作成し

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
12.点滴静脈内注射を受ける患者の看護	2014年12月	た。 この科目は基礎看護Ⅳ－2において、１年生後期に学習する。点滴静脈内注射を受ける患者は多く、看護師として日常的に行う看護である。学生自身も病院実習で看護学生として経験することが多い。技術の手順を暗記するのではなく、根拠を考えることができるように、講義のみならず複数の事例をグループで検討しレポート作成をする演習形態をとり工夫した。
13.注射法に関する講義・演習資料	2014年12月	基礎看護技術演習Ⅳ－2の科目で使用する講義・演習資料、確認テスト、試験問題を作成した。注射は、患者に侵襲を加える技術である。安全にかつ安楽に実施しなくてはならない。また、患者への安全に加えて実施する看護師の安全も考えなくてはならない。これには、正確な技術の実施のみならず薬理学・解剖生理学の知識が必須である。看護学生にとっては、総合的な知識と正確な実施が求められるため難しい科目である。事前課題を行うことで、授業を受ける前に学生自身で調べ、どのような知識が必要であるかを知った上で授業に臨み、授業中に答えあわせを行いながら進行することで、受身の授業とならず主体性を持って授業に臨める様に工夫した。また、要点を絞り講義演習において要点を繰り返し教えることで学生の記憶に残るように工夫した。
14.与薬に伴う看護に関する講義資料	2014年12月	基礎看護技術演習Ⅳ－2の科目で使用する講義資料・試験問題を作成した。この項目は1年生後期に学習する。与薬は看護師として勤務する中で日常的に実施する援助であるが、医療事故の多い援助でもある。与薬における医療事故は患者さんの生命を脅かす重大な事故となることもある。実際に起こった医療事故の事例を用いて、正確に安全に実施する必要性とその方法、看護師の役割・責任を学生自身が考え理解することができるように工夫して作成した。
15.検査時の看護技術に関する講義・演習資料	2014年11月	基礎看護学Ⅳ－2の科目で使用する講義資料・演習資料・課題・確認テスト・試験問題を作成した。この科目は、1年生後期の診療の補助技術で学習する科目である。検査内容の正しい理解・検査時の看護師の役割を理解し、正確に実施することが必要となる科目であるため、学生自身が考え主体的に授業に臨め、知識を習得できるように、事前課題・授業時の学生の意見発表・演習の実施・確認テストの実施といった流れで授業・演習を構成し工夫した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1.キャリア対策委員	2020年4月1日～	学生の就職支援活動として、就職説明会の開催、個別の就職相談・就職面接練習や履歴書作成指導を行っている。また、ホームカミングディを設けて、定期的に卒業生と在校生の交流や卒業生に対する支援を行っている。
2.看護学部親睦会	2019年4月1日～2020年3月31日	看護学部親睦会委員長として、看護学部内の慶弔や歓送迎会の開催、退職者への対応等を運営している。
3.国試対策担当委員	2019年4月1日～2020年3月31日	担当学生の定期的な面談とメール連絡を行い、学生生活、私生活及び国家試験の勉強を両立できるように支援している。
4.看護学部広報入試委員	2018年5月1日～2019年4月31日	オープンキャンパスの運営やキャンパスガイドの作成に携わり、広報活動として看護学部のブログを分担して担当した。
5.兵庫県看護協会（生涯学習担当）	2017年5月1日～現在	兵庫県看護協会が主催する再就業支援研修において、年２回講義と演習を行っている。看護協会担当者との打ち合わせ、講義・演習準備、講義・演習の実施を

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
		担っている。2019年度は講義のうち「呼吸」の項目を担当し、講義・デモンストレーションを行った。2020年度は、演習科目である「事例に基づく身体アセスメントの実施」の主担当を担い、事例を作成し、シュミレーターモデルを使用して受講生が身体的なアセスメントを行うグループワークを行った。
6.男女共同参画委員	2016年4月～2017年3月	男女共同参画委員として、各学部の教員と意見交換を行い、より良い職場作りを目指し活動を行った
7.看護学部学生委員	2015年4月1日～2018年4月31日	学生委員として、充実した学生生活となるように支援した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.養護教諭専修免許	2011年3月31日	
2.保健師免許	2009年4月13日	
3.看護師免許	2009年4月13日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.兵庫県看護協会主催　再就業支援研修会	2015年9月~現在	再就業を考えている未就業看護職を対象とした、兵庫県看護協会が主催する再就業支援研修会にて、身体アセスメントと創傷ケアの講義・演習を実施している。
2.武庫川女子大学朝小サマースクール	2015年8月	武庫川女子大学朝小サマースクールにて小学生を対象とし、手洗いの必要性と手洗い方法に関する健康教育を実施した。
3.オープンキャンパスでの実習室企画運営	2014年4月～2019年3月	オープンキャンパス時に、高校生や保護者を対象として基礎看護学実習室で実施している、血圧測定体験、シュミレーションモデル（シムマン）を用いたデモンストレーション、実習室説明や白衣の着用体験を行っている。看護の基礎的な分野であるため、看護学部を目指したいと思ってもらえるよう、身近な話題から専門的な内容へと企画し、分かりやすい言葉で説明するようにしている。
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1.全身浴との比較からみた手浴のリラクセーション作用の検証	単	2020年3月	武庫川女子大学大学院看護学研究科	手浴の温熱作用は加温部以外の表面皮膚温度を上昇させ、主観的にも全身的な温度感覚や快をもたらすかを全身浴の温熱作用と比較し明らかにすること、そして、手浴は生理的にも主観的にもリラクセーション作用をもたらすかを全身浴と比較し検証することを目的に第１研究および第２研究を行った。第1研究は、全身浴と手浴が及ぼす表面皮膚温の変化および温度感覚・温熱的快不快感からみた手浴がもたらす温熱作用の検証を、第２研究では、全身浴との比較からみた手浴のリラクセーション作用の検証を行った。第１研究と第２研究の結果から、手浴による局所の加温は、全身浴と同様に温熱作用をもたらし、リラクセーション作用をもたらすことが明らかとなった。
2.膵切除術後のquality of life (QOL)の検討	単	2011年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻	本研究では、A大学医学部附属病院にて、膵頭十二指腸切除術（PD）と膵体尾部切除術(DP)を施行された患者105名を対象として、一般的なQOLの尺度であるSF-36、癌患者を対象としたQOLの尺度であるFACT-G、消化管に関して特異的なQOL評価の尺度であるGI-QLIを用いて、自己記入方式にて調査を行いQOL評価を行った。調査時点は、術前、術後2週、6週、6ヶ月、1年、2年、3年に行った。結果より、PDに関して、術後2週･6週に身体･社会的に影響を受けQOLは低下する

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
				が、術後6ヶ月に術前と有意差がなくなるまで回復した。また、SF-36における国民標準値との比較では、身体･社会面において術後2週･6週に、QOLは国民標準値と比較し有意に低値を示すが、術後6ヶ月に有意差がなくなるまで回復した。また、『日常役割機能･身体』『日常役割機能･精神』は術前より低値を示し、身体･精神的な要因により術前より日常の活動に影響を及ぼしていた。DPに関して、SF-36･FACT-G･GIQOLの結果から、身体･社会面において術後2週にQOLは低下するが、術後6週に術前と有意差がなくなるまで回復し、また、身体的な術後急性期のQOL低下の回復がPDと比較し早期であることが分かった。SF-36における国民標準値との比較に関して、身体面で術後2週にQOLは国民標準値より有意に低値を示すが、術後6週に有意差がなくなるまで回復した。『日常役割機能･身体』『全体的健康感』『社会生活機能』『日常役割機能･精神』は術前から術後経過において国民標準値よりも低値を示しており、術前から健康感が低く、身体･精神的な要因により日常生活･社会生活に影響及ぼすことが分かった。以上のことから、術式により差は生じるが、疾患･入院･治療により身体･精神･社会面に長期的な影響を及ぼしていることが明らかとなった。
3 学術論文				
1.肥満体型高齢者の頭部挙上角度の違いからみた仙骨部・臀部血流量の比較「査読付」	共	2020年4月	日本健康医学会雑誌	岩﨑幸恵、杉浦圭子、片山 恵、田丸朋子、<u>山口晴美</u>、徳重あつ子、阿曽洋子 【概要】 シルバー人材センターに登録する標準体型高齢者14名を対象に頭部挙上20度時、25度時、30度時の仙骨部・臀裂部・左右臀部の4ヶ所の血流量を測定した。 結果及び考察として、頭部挙上20度では、圧迫によるうっ滞は認めたが、血流量の減少は認めず、各部位に褥瘡発生につながる要因は認められなった。頭 部挙上25度においては、圧迫によるうっ滞の後、20分経過後より血流量の減少が左臀部を除く部位においてみられていた。頭部挙上30度では、特に左右臀 部にうっ滞の程度も大きく、その後の現象も他の角度よりみられた。これらより肥満体型の高齢者においては、褥瘡予防のための挙上角度として30度ルールを適応すると、特に臀部に負荷をかける可能性があると考えられた。
2.全身浴との比較から見た手浴の心身へ及ぼすリラクセーション作用の検証「査読付」	共	2020年3月	Health and Behavior Sciences,18(2), pp. 67-74,2020.3	<u>山口晴美</u>、田丸朋子、片山　恵、阿曽洋子 【概要】 The present study validated the relaxation effect of hand bath and whole-body bathing to compare whether hand bath has the same relaxation effects as whole-body bathing on 18 healthy female college students. Whole-body bathing and hand bath were performed on different days. The bathing methods were conducted for 10 min with hot water (～40℃), followed by a 60-min rest period. The R-R interval, CVR-R, HF, LF/HF, and subjective responses were measured by the Profile of Mood States 2nd Edition (POMS2; Japanese version). During whole-body bathing, the R-R interval was significantly shortened, HF values decreased, and LF/HF values increased, compared with baseline (all p .05). After whole-body bathing, the R-R interval extended and HF values increased, but this difference was not significant. Conversely, after hand bath, the R-R interval initially extended gradually and then extended significantly while resting; the HF values initially decreased significantly at 1-5 min but then increased significantly at 11-15 min (all p .05). The LF/HF values did not markedly change after hand bath. “Tension-anxiety” and “fatigue-inertia” scores by POMS2 decreased

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				significantly after hand bath (all p .05). However, these scores did not markedly change after whole-body bathing. According to the results, parasympathetic nervous system activity was enhanced during resting after hand bath, leading to a relaxation state, and it subjectively relieved mental and physical tension and reduced fatigue. However, the same effect was not observed after whole-body bathing. These results indicated that hand bath as nursing care has more relaxation effects than whole-body bathing.
3.標準体型高齢者の頭部挙上角度の違いからみた仙骨部・臀部血流量の比較「研究報告、査読付」	共	2019年3月20日	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 4,pp.69-76,2019.3	岩﨑幸恵、阿曽洋子、宮嶋正子、片山恵、田丸朋子、山口晴美 、杉浦圭子 【概要】 本研究は、高齢者の体型差を考慮した褥瘡予防ケア開発の為の基礎研究として、標準体型高齢者の褥瘡予防におけるベッド挙上角度はどの角度が望ましいのかを明らかにするために、標準体型高齢者17名を対象に頭部挙上20 度時、25 度時、30 度時の各仙骨部、臀裂部、左右臀部の計4 箇所の血流量を測定した。結果及び考察として、仙骨部時間経過別血流量では、先行研究でも言われている通り、前期高齢者においては頭部挙上30 度までなら仙骨部には負荷をかけないといった結果が実証された。また、左右の臀部時間経過別血流量では、頭部挙上25 度時と30 度時のベースライン血流量から一部の時間経過において血流量が有意に増加しており、臀部は圧迫を受けやすい部位でもあり血流量増加の原因はうっ滞である可能性もあることから、今後圧迫状況も踏まえた検証の必要性が示唆された。
4.温熱作用に関して手浴が全身浴の代用となる可能性の検証-表面皮膚温の変化および温度感覚・快適感覚から-「原著論文（査読付）」	共	2019年3月20日	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 4,pp.13-23,2019.3	山口晴美、阿曽洋子、田丸朋子、片山恵、清水佐知子、岩﨑幸恵、上田記子 【概要】温熱作用に関して手浴が全身浴の代用が可能かについて、健康な女子大生18名を対象に比較検証した。方法は、全身浴と手浴を別日に実施し、湯温約40℃の全身浴及び手浴を10分間行いその後60分安静とした。左右の手背・前腕・下腿・足背の8箇所の皮膚温を連続測定し、温度感覚と快適感覚も調べた。全身浴と手浴は、どちらも左右の手背・前腕・下腿の皮膚温を上昇させ実施後60分までその影響が続き、実施後60分値に差がなく、基準値より有意に高く同様の温熱作用を及ぼした。温度感覚は、手浴と全身浴とも浸水していた手は実施後に高まり両者で差がなかった。手浴中湯外の部分は、実施後は全身浴より低いが、終了時には全身浴と差がなくなっていた。快適感覚は、手浴も全身浴も実施後の快適感は高まるが、終了時は手浴の方が高かった。以上より、手浴は全身浴の代用として有効であり、手浴の温熱作用は全身浴と比べて快適感が高い可能性が示唆された。
5.Experiences of Nurses in the Process of Determining a Nursing Diagnosis and Needs for Applying a Nursing Diagnosis: Fostering Understanding to Support the Use of Nursing Diagnoses in Clinical Practice「査読付」	共	2017年3月	Journal of Comprehensive Nursing Research and Care,2017, 2: 107	Yasuko Kume, Harumi Yamaguchi ＜Abstract＞ This study illustrates through experiences of nurses while determining nursing diagnoses in terms of thought, behavior, and emotion. It demonstrates current issues in and the needs for support in the use of nursing diagnoses.Data were collected through conducting semi-structured interviews based on an interview guide concerning the experiences of nurses and their awareness of issues in the process of determining nursing diagnoses.Principal Results and Major Conclusions: Followingten categories were selected upon considering the experiences of nurses in determining nursing diagnoses from a thought perspective: [Comparison with defining characteristics], [Confirmation of defining characteristics, related factors, and definition],

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				[Searching for potential nursing diagnoses from main symptoms and problems], [Considering nursing diagnosis from nursing intervention and outcome], [Patterned thinking relating to specific diagnoses], [Considering some temporary nursing diagnoses and monitoring progress], [Identification of multiple nursing diagnoses], [Comparison of some nursing diagnosesby pickingpotential diagnoses of defining characteristics or related factors, definition], [Integrating multiple nursing diagnoses], and [Avoiding nursing diagnosis decisions]. From the behavioral and emotional perspectives, emphasis was placed on [Confirming and reviewing with other staff to determine a diagnosis] and [Solo confirmation and review to decide on a nursing diagnosis]. These were found to be driven by: [Pressure to provide a nursing diagnosis], [Sense of burden over task load that goes with nursing diagnoses], [Anxiety when determining a nursing diagnosis], [Negative emotions towards nursing diagnoses], and [Decline of negative emotions towards nursing diagnoses]. Needs for nursing diagnosis application included [Needs for fostering understanding and learning of nursing diagnosis], [Needs for expanding the process of nursing diagnosis], [Needs for nursing diagnosis and nursing intervention for patients in specific situations], [Needs for the application of an electronic health record system], and [Needs for thinking ability in applying nursing diagnosis], suggesting a need to foster understanding of nursing diagnoses and application of examples.
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.看護診断使用施設の記録作成に関する サポートニーズと改善ニーズの特徴	共	2019年12月	第39回日本看護科学学会学術集会	久米弥寿子、 山口晴美、冨澤理恵 【概要】 全国調査を実施し看護診断を使用している施設の看護記録の媒体・内容とサポートニーズと改善ニーズの実態や特徴を明らかにした。結果より、診療所や訪問看護ステーションでは紙媒体が多く病床数が多い病院ほど電子媒体を使用し看護過程・看護診断の使用率が高いことが伺われた。施設別で看護診断使用の有無によるサポートニーズ等を見た場合には100～500 床未満の施設で看護診断使用の施設でサポートニーズ等に対する必要性の回答者割合が高い傾向が示された。以上より、施設による記録媒体や看護過程等の使用状況に差があると推測され、100～500 床未満の中規模施設で看護診断使用の施設でサポートニーズや改善ニーズがあることが推測される。実習指導を行う際施設別で記録媒体や内容に違いがあり、実態に合わせた実習指導内容の検討を行うとともに現任教育やスタッフへのサポートも必要であると考える。
2.全身浴及び手浴が心身へ及ぼす リラクセーション作用の検証 ― 健康成人女性の自律神経活動及び主観的反応の観点から	共	2019年8月	日本看護研究学会第45回学術集会	山口晴美、片山恵、清水佐知子、田丸朋子、阿曽洋子 【概要】 健康成人女性への手浴と全身浴に対する自律神 経活動及び主観的反応からみたリラクセーション作用を明らかにすることを目的に実施した。結果より、R-R間隔・心拍数の変化から、手浴中は交感神 経活動が抑制される一方で全身浴では亢進する事が明らかとなった。またPOMSからも手浴は終了時に心理的にも緊張感や疲労感が緩和されたが，全身浴ではそ のような反応はなかった。このことから、全身浴より手浴の方が心身へ及ぼすリラクセーション作用が強い事が示唆された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
3.看護記録メディア分析全国調査に 基づく施設別の看護記録作成に関する サポートニーズと改善ニーズの関連	共	2019年8月	日本看護研究学会第45回学術集会	久米弥寿子、 山口晴美、冨澤理恵 【概要】 多種施設における看護記録のメディア分析全国調査におけ る施設別の看護記録作成に関するサポートニーズと改善 ニーズの関連性を明らかにした。結果より、一般病院や訪問看護ステーションでは記録の種 類の多さの改善ニーズを認識している施設ほどサポート ニーズが高くなると推測された。記録の形式や種類はサ ポートニーズと関連しており重要な観点であると再認識した。
4.看護記録のメディア分析実態評価に基づく人口対医療施設数別によるサポートニーズ（第二報）	共	2018年12月	第３８回日本看護科学学会学術集会	冨澤理恵、久米弥寿子、 山口晴美 【概要】 本研究では、人口対医療施設数別による看護記録のメディア分析として、質問紙調査により看護記録の媒体や記録方法・内容やサポートニーズを実態調査で明らかにした。また、その結果に基づき、記録に関する教育のあり方を検討した。結果より、人口対医療施設数によって、看護診断、電子カルテシステム、記録料についてサポートニーズが違っていることが示唆された。
5.看護記録のメディア分析全国実態調査の自由記載にみる現状と課題	共	2018年12月	第３８回日本看護科学学会学術集会	久米弥寿子、 山口晴美、冨澤理恵 【概要】 本研究では、看護実践や臨地実習の場が多様となり、看護記録も一様ではないことから、看護過程の教育のあり方を見直すためにも実態把握が必要である。訪問看護ステーション等を含む全国調査を実施し、施設別の看護記録の媒体・内容、サポートニーズの実態や特徴を明らかにした。結果より、診療所や訪問看護ステーションでは紙媒体が多く、病床数が多い病院ほど電子媒体で看護過程・看護診断の使用率も高いことが伺われた。施設5群別のサポートニーズには有意差があったが、施設ごとでの記録媒体とサポートニーズに関連性はなく、施設別での記録媒体や看護過程等の使用状況に差があると推測される。実習指導を行う際、施設別で記録媒体や内容に違いがあり、実態に合わせた指導内容の検討が必要である。
6.全身浴と手浴の表面皮膚温の変化から見た手浴の全身浴代用としての可能性の検証	共	2018年12月	第３８回日本看護科学学会学術集会	山口晴美、阿曽洋子、田丸朋子、片山恵、岩崎幸恵、上田記子、清水佐知子 【概要】 全身浴の表面皮膚温(以下皮膚温)の変化と部分浴である手浴の皮膚温の変化を比較し、手浴が全身浴と同様の温熱効果を示し全身浴の代用が可能かを検証した。結果より、全身浴と手浴は、どちらも湯の温熱効果により全身8箇所の皮膚温を上昇させ実施後60分までその影響が持続すること、全身浴と手浴の実施後60分値に差がなく基準より有意に高値を示すことが分かった。以上のことから、手浴は全身浴と同様の温熱効果を示し全身浴の代用が可能であることが示唆された。
7.全身浴との比較から見た手浴が及ぼすリラクセーション作用の検証ー成人女性の副交感神経活動に及ぼす影響からー	共	2018年10月27日	第２６回看護人間工学部会総会・研究発表会（口演）	山口晴美、阿曽洋子、田丸朋子、片山恵、岩崎幸恵 【概要】 全身浴と部分浴である手浴が成人女性の副交感神経活動へ及ぼす影響を比較し、手浴が全身浴と同様にリラクセーション作用をもたらすかを検証した。結果より、手浴も全身浴も実施後安静にすることによりHFApower値は上昇し、副交感神経活動が優位となりリラクセーション状態へ導かれること、全身浴より手浴は終始HFApower値が高く、手浴は全身浴より副交感神経活動が優位のまま安定しリラクセーション状態が維持されることが示唆され、手浴は全身浴と同様にリラクセーション作用をもたらすと考えられた。また、どちらも開始直後にHFApower値が低下しており、交感神経活動が優位となり、更に全身浴の方がその影響を強く受けることが示唆された。今後は、交感神経活動や心拍数の変化も踏まえ分析していく。
8.施設特性による看護	共	2018年8月	日本看護研究学会	久米弥寿子、山口晴美、冨澤理恵

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
記録のメディア分析とサポートニーズに関する全国実態調査（その２）			第44回学術集会	【概要】 全国の多種施設における看護記録のメディア分析という観点で看護記録の媒体や記録方法・内容，記録作成についてのサポートニーズを実態調査で明らかにした。また，その結果に基づき，記録に関するサポートのあり方を検討した。結果より，実際には紙媒体と電子媒体の両方を使用していた。また，看護診断の使用については，全国的にも約３割という状況であり，記録の質的向上のサポートニーズがあり看護基礎教育での教育基盤と共に継続教育での展開の必要性が再認識された。
9.上方移動援助時におけるスライディングシートの有無による患者移動時間・腰部椎間板圧迫力の違い	共	2018年8月	日本看護研究学会第44回学術集会	田丸朋子，本多容子，山口晴美，谷口千夏，阿曽洋子 【概要】 上方移動援助時のスライディングシートの有無が患者移動時間および腰部椎間板圧迫力の大きさに及ぼす影響を検証することを目的とした。 結果より，スライディングシートは患者とベッドとの摩擦抵抗を減らすことで移動をしやすくする。しかし今回，シートを使用した群のFcが逆に高いとの結果となった。これは，移動がしやすくなったために主に腕の力を使用して援助を 行ったため，患者との距離が遠くなったことが原因であると考えられる。患者との距離が遠くなると，看護師の援助 姿勢は距離が近いときに比べて不安定となるため，自身の 身体を支えるためにFcが高くなる。しかし，患者移動時 間は短縮していることから，スライディングシート使用時の援助姿勢を見直し，患者との距離を近づけて使用するよう心がければ，腰部負担の減少につながる可能性もあると考えられる。
10.主観的指標による全身浴と手浴が及ぼすリラクセーション作用の検証	共	2018年3月17日	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会	山口晴美、田丸朋子、片山恵、岩﨑幸恵、清水佐知子、阿曽洋子 【概要】 全身浴と手浴に対するリラクセーション作用を主観的指標（日本語版POMS2）を用いて検証することを目的とした。20歳の健康な女子大学生9名を被験者とし、実験は10分間のベッド上安静後、10分間の全身浴もしくは手浴を行い、その後60分間のベッド上安静としこの3時点で調査を行い評価した。結果より全身浴と手浴どちらも身体的な緊張が緩和され、ネガティブな気分が軽減したり疲労感が軽減したりとリラクセーションへ導かれていることが考えられた。一方で、「疲労」については、手浴においては実施前と実施後、実施前と終了時で有意に低下したが、全身浴においては有意差を認めなかった。この結果から、全身浴と比べて手浴において、より疲労感が軽減する可能性が示唆された。
11.看護記録のメディア分析実態調査に基づく地域・施設特性による傾向とサポートニー ズ（第一報）	共	2017年12月17日	第３７回日本看護科学学会学術集会	久米　弥寿子、 山口　晴美 、冨澤　理恵 【概要】 多種施設における看護記録のメディア分析として、質問紙調査により看護記録の媒体や記録方法・内容やサポートニーズを実態調査で明らかにしその結果に基づき記録に関する教育のあり方を検討した。看護記録の媒体・形式・内容について問う自作の質問紙調査票を作成し、厚生労働省平成26年医療施設（動態）調査の概況に基づき病床数別の病院・診療所・訪問看護センター等の割合で層化し、ランダムサンプリングにより対象施設を抽出した。回答は選択式を基本とした。記入は看護部門責任者に依頼した。本報では、東北・関東地方への配布(計456部)の調査報告を行った。首都圏を除いた調査のため地域差は認められなかったと推察する。また様々な施設を対象とした調査を行ってみると看護過程を展開しない施設、クリティカルパス使用、看護診断を使用していない施設も多いことが明らかとなった。
12.上方移動援助時におけるベッドの高さと看護師の腰部負担との関係　－TAMAツー	共	2017年8月	日本看護研究学会第43回学術集会	田丸朋子、阿曽洋子、本田容子、 山口晴美 【概要】 本研究は、看護師がベッド上の患者に対して行う上方移動援助時に

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
ルを用いた分析－				おけるベッドの高さと，看護師の腰部負担との関係を明らかにすることを目的とした。結果より、被験者の平均勤務年数は12年であり，全国の看護師の勤務経験年数の中央値とほぼ同様となった。次に，TAMAツール得点のＰ得点と総合得点に，ベッドの高さの違いで有意差があったが，M得点には差がなかった。ベッドが通常作業域内に患者が位置することで，看護師の姿勢の安定性が向上し負担の少ない援助姿勢をとることができるため，腰部負担の軽減につながったと考えられる。M得点に差がなかったのは，援助を二人で実施したり，スライディングシートを使用するといった，効率性を向上させるケースがいずれのベッドの高さの場合にも含まれていたためと考えられる。
13.看護診断を決定する過程における看護師の感情と課題意識の臨床経験による特徴	共	2017年7月	第23回日本看護診断学会学術集会	山口晴美 、久米弥寿子、冨澤理恵 【概要】 本研究は，看護診断を決定する過程における看護師の感情と課題意識について,臨床経験による特徴を明らかにし，臨床経験に応じた組織的支援体制のあり方の検討への手がかりを得ることを目的とした．結果より看護診断の決定や不慣れな看護診断に対し臨床経験を問わず不安や負担感を抱いており理解が困難という課題意識へつながること，また看護診断への苦手意識は若手群で，使用に伴う抵抗感は年長群で見られ，学生時代の看護診断教育の有無等の教育背景の影響が推察された．臨床経験に応じた理解促進のための情報提供や，年長者への電子カルテシステム使用の支援，若手への効果的な学習機会の提供等，臨床経験を考慮した組織的なサポートシステムの構築が必要であることが考えられた．
14.看護診断を決定する過程における看護師の志向・行動傾向の臨床経験年数による特徴	共	2016年12月	第36回日本看護科学学会学術集会	上田 記子、久米 弥寿子、山口 晴美 、冨澤 理恵、片山 恵 【概要】 本研究では、１）看護診断の決定に関連した看護師の経験内容について、その際の思考・行動・感情傾向の観点から明らかにし、２）看護診断を行う上での課題意識を抽出し、３）これらの結果から実態に即した職場サポート体制を検討した。結果より、臨床現場では、必ずしも看護診断プロセスが段階的ステップではなく、経験的・直感的思考も含めながら展開しており、同僚間での意見交換や承認の機会が重視されていることが示された。また電子カルテ使用や情報共有のあり方等の課題があげられ、電子カルテの形式や使用法についての対策や終末期ケアと看護診断、不慣れな看護診断を活用するサポートの必要性が示唆された。
15.看護診断決定に関連した看護師の思考･行動･感情傾向と課題意識に対する改善策の検討	共	2016年8月	日本看護研究学会第42回学術集会	山口 晴美、久米 弥寿子、上田 記子、阿曽 洋子、片山 恵 【概要】 本研究では，看護診断の決定に関連した看護師の思考・行動・感情の傾向を明らかにし，看護診断を行う上での課題意識を抽出し，臨床現場に即した看護診断の活用のための改善策を検討した．結果より看護診断の決定に関連したパターン化された思考の傾向から，臨床現場では使用頻度の高い診断に対して経験に基づきパターン化して診断している状況が推察された．このパターン化された思考の傾向については，看護診断の理解の難しさや電子カルテシステム導入による思考の単純化といった看護師自身の課題意識も踏まえ，その実情を究明し，個々のニーズに合う学習機会の提供や，電子カルテシステムの改善等の効果的な看護診断の活用策を検討していく必要がある．
16.看護診断決定に関連した看護師の経験内容や課題意識に基づくサポート体制の検討	共	2015年12月	第35回日本看護科学学会学術集会	久米 弥寿子、阿曽 洋子、片山 恵、上田 記子、谷口 千夏、 山口晴美 【概要】 看護診断の決定に関連した看護師の経験内容について、その際の思考・行動・感情傾向の観点から明らかにし、看護診断を行う上での課題意識を抽出した結果から、現状に即した職場のサポート体制を

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				検討した。結果、臨床現場では看護診断プロセスが必ずしも段階的プロセスではなく、経験的・直感的思考も含めながら展開しており、同僚間での意見交換や承認の機会が重視されていることが示された。また、電子カルテ使用や情報共有のあり方等の課題があげられた。
17.看護診断事例検討会における診断候補と疑問点の傾向に基づく看護診断研修における教育的サポートのあり方の検討	共	2015年8月	日本看護研究学会第41回学術集会	久米 弥寿子、 山口 晴美 、上田 記子、阿曽 洋子 【概要】 本研究では、看護診断事例検討会であげられた看護診断候補及び疑問点やその他の事項について、検討会開催時期による傾向を明らかにすることにより、検討会の効果と課題を考察すると共に今後の教育的サポートのあり方を検討した。その結果、事例やグループ数は異なるが、参考値との比較で２期の診断候補数の割合が高く複数診断も多かった。また「臨床判断」に関する疑問は２期で多く、これより当初より幅広く看護診断を検討しているが最終的に絞りきれない状況があると推測される。一方、２期で「診断の根拠」の記述が見られ、「（特定しない）セルフケア不足」は無かった結果から、事例検討会継続により一部の診断に関する基礎知識の定着は推察される。「セルフケア不足」では、他の診断による介入を検討する傾向があることが判明した。
18.膵切除術後のquality of life (QOL)の検討	共	2010年7月	第65回日本消化器外科学会総会	柴山(山口) 晴美 、梅下 浩司、武田 裕、和田 浩志、小林 省吾、丸橋 繁、江口 英利、種村 匡弘、永野 浩昭、森 正樹、土岐 裕一郎 *ポスター優秀演題賞受賞 【概要】 A大学医学部附属病院での膵頭十二指腸切除術(PD:53名)、膵体尾部切除術(DP:39名)施行患者に対し、術前から術後経時的にSF-36とFACT-Gを用いてQOLの変化の検討を行った。DPに関しては、開腹下切除術、腹腔鏡補助下切除術施行患者のQOL比較を行った。結果として、SF-36では、PDは術前と比較し術後2Wに「身体機能」「体の痛み」が有意に低下し、「身体機能」は術後6ヶ月に「体の痛み」は術後1年に術前と比較し有意差がなくなるまで回復した。DPは、術後2Wに「身体機能」「日常役割機能･身体」「体の痛み」が有意に低下した。膵切除術後のQOLは、術後急性期に低下し、術後6か月から1年にかけて回復する。また、DPでは術後急性期のQOLは開腹下より鏡視下の方が勝ることが示唆された。
３．総説				
1.The Future State of Nursing Education in Japan with Respect to the Nursing Process and Nursing Records: Understanding the Current Needs and Suggestions for the Future.	共	2017年12月	Yasuko Kume, Rie Tomizawa, Harumi Yamaguchi (2017). Journal of Comprehensive Nursing Research and Care, Volume 2. 116.	
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
６．研究費の取得状況				
1.汚染除去可視化による清潔のセルフケア能力アセスメントツールの開発	共	2019年4月	日本学術振興会	令和元年度　科学研究費（基盤研究C：19K10817） 分担研究者 （代表：片山恵－武庫川女子大学）
2.看護師間コミュニ	共	2019年4月	日本学術振興会	令和元年度　科学研究費（基盤研究C：19K10757）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
ケーションの定量化と可視化に基づく離職防止対策と教育的課題				分担研究者 （代表：久米弥寿子－武庫川女子大学）
3.全身浴との比較による手浴が心身へ及ぼすリラクセーション作用の検証	単	2016年4月	武庫川女子大学科学研究費補助金採択研究助成金	代表研究者 手浴と全身浴のリラクセーション作用について、健康成人女性および健康高齢者を対象に検証を行っている
4.全身浴との比較による手浴が心身へ及ぼすリラクセーション作用の検証	単	2016年4月	日本学術振興会	平成28年度　科学研究費（若手B：16K20738） 代表研究者
5.看護過程・看護診断過程に関連するメディア・内容・送り手分析に基づく看護教育の検討	共	2015年	日本学術振興会	平成27年度　科学研究費（基盤研究C：15K11537） 分担研究者 （代表：久米弥寿子－武庫川女子大学）

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2019年9月	武庫女看護フェスタ　プログラム企画運営
2.2018年10月27日	第２６回日本看護人間工学部会　実行委員
3.2018年～現在	日本健康行動科学会
4.2017年4月～2018年3月30日	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会　企画委員
5.2016年10月～現在	日本人間工学看護人間工学部会
6.2016年7月～現在	日本看護診断学会
7.2016年6月～現在	日本人間工学会
8.2015年9月～	兵庫県看護協会主催　再就業支援研修会　講師
9.2015年6月～現在	日本看護科学学会
10.2015年3月～現在	日本健康医学会
11.2014年～現在	日本看護技術学会
12.2014年～現在	日本看護研究学会
13.2014年～2015年	お父さんのための育児セミナー　協力
14.2007年10月～2008年9月	大阪大学大学院医学系研究科 子どものこころの分子統御機構研究センター　研究支援員